

平成16年度試験研究課題設定のための要試験研究問題提案・回答書

(整理番号) 86 ※記入不要	提案機関名 県央地区農政事務所
要望問題 水源林地域における埋土種子集団の調査	
要望問題の内容 【 背景、内容、対象地域及び規模（面積、数量等） 】 現在、ダム上流域などの水源林について、森林整備事業を行っているが、潜在的にその森林が持っている植生回復機能が明らかになっていないまま事業が進んでいる。 植生回復の重要な要因となる埋土種子集団を調査することで、どういった施業が可能か明らかになると考えられる。	
解決希望年限	①1年以内 ②2～3年以内 ③4～5年以内 ④5～10年以内
研究対応区分	①研究所対応 ②委託研究 ③共同研究 ④その他
対応を希望する研究機関名	①農業総合研究所（②根府川試験場 ③三浦試験場 ④津久井試験場） ⑤畜産研究所 ⑥水産総合研究所（⑦内水面試験場 ⑧相模湾試験場） ⑨自然環境保全センター
※ ここから下の欄は、回答者が記入してください。	
回答機関名	自然環境保全センター
対応区分	①実施 ②実施中 ③継続検討 ④実施済 ⑤調査指導対応 ⑥現地対応 ⑦実施不可
試験研究課題名 (①、②、④の場合)	
対応の内容等 埋土種子は植生回復手法として有効であることがわかっています。しかし水源林の整備予定地で埋土種子を調査することは非現実的です。なぜなら、地下部よりも地上部の樹木・草本の構成で目標林を想定し、作業法を決定できるからです。また、現在実施中の水源林整備モニタリングが進行するなかで事業および目標林の検証ができると考えるからです。 なお森林の場合、大きな（100㎡以上）ギャップができるとカラスザンショウやアカメガシワなどの先駆性樹木（攪乱依存種）が出現することが知られており、これは埋土種子由来であることがわかっています。そのため水源林整備でも伐採面積を大きくすると、遷移途中の林相を遷移初期段階に戻ることが予想されます。 施業を考える際には『水源林整備マニュアル』を使って目標とする森林を決定することが必要です。 埋土種子の構成：地上に出現している種＋していない種 長所：潜在的な出現種の把握 植生回復の目安 短所：空間的な不均一 地上部植生とは対応していない（対応するのは耕作地や草原） すべての埋土種子が発芽できるわけではない。	
解決予定年限	①1年以内 ②2～3年以内 ③4～5年以内 ④5～10年以内
備考	